

2005年(第14回)「ブループラネット賞」の受賞者決定!

氷河期 - 間氷期の気候変動の周期、二酸化炭素の関わりとそれを引き起こす地球軌道の変化を明らかにし、古気候学に貢献、将来の気候変動予測に大きく寄与した

ニコラス・シャックルトン教授
(英国)

エリトリアで斬新なマングローブ植林技術を開発し、最貧地域における持続可能な地域社会の構築の可能性を示し、先駆的な貢献をした

ゴードン・ヒサシ・サトウ博士
(米国)

財団法人旭硝子財団(理事長 瀬谷博道)の地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、今年で第14回目を迎えました。本賞は、地球環境問題の解決に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人、または組織に対して毎年2件贈られるものです。

1) ニコラス・シャックルトン教授(英国) ケンブリッジ大学地球科学科名誉教授
ゴッドウィン第四紀研究所前所長

地球の過去の気候変動を知ることは、今後の気候変動をシミュレーションする際の信頼性を向上する上で重要です。シャックルトン教授は地質学的には地球の歴史からするとごく最近である第四紀、現代から約180万年前までに着目し、その間に何度も繰り返された氷床の消長をより正確に解析する手法を編み出し、古気候学に大きく貢献しました。また、第四紀の気候変動を理解することを通して、地球温暖化ガスの増加が、過去に起こったと同様の、急激な気候変動の引き金になるかもしれないことに私達が気付かなければいけないと警告を発しており、人類は地球温暖化ガスの放出を規制する努力が必要であると力説しています。

2) ゴードン・ヒサシ・サトウ博士(米国) W. オルトン・ジョーンズ細胞科学センター名誉所長
A&G 製薬取締役会長/マンザナル・プロジェクト代表

博士はご自身が第二次世界大戦中に日系人としてカリフォルニアの砂漠地に強制収容された経験から、砂漠地のような厳しい環境下でいかにして食料を生産するかという課題と取り組んで来ました。砂漠地での養殖漁業を実現した後、さらに、「飢餓に苦しむ途上国での生態学に基づく食糧生産計画と環境保全」を進め、エリトリアにおいて斬新なマングローブ植林技術を開発し、それを利用した家畜生産技術に発展させ地域住民の生活改善を通して持続可能な地域社会の構築の可能性を示しました。これは、最貧地域における経済的な自立への一方策を具体的に立証したもので、その功績は極めて大きく、環境の保全の技術というものを地道に取り上げる生き方、ヒューマニズムの大切さを訴えています。

- 受賞業績1件に対して、賞状、トロフィーおよび副賞賞金5千万円が贈られます。
- 10月20日(木)には受賞者による記念講演会を国際連合大学(東京都渋谷区)で開催いたします。

※本リリースは、環境省記者クラブならびに環境省記者会に配布しています。
また、インターネットでもご覧いただけますので、ご参照ください。

本年度（第14回）の選考経過

国内1,100名、海外1,400名のノミネーターから129件の受賞候補者が推薦されました。候補者の分野は、多い順に生態系40件、環境経済・政策19件、気候・地球科学15件などでした。

候補者は38カ国にまたがっており、途上国からの候補者は18件あり、全体の14%に相当します。

選考委員会による数次の審査をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会・評議員会で、1件はニコラス・シャックルトン教授が、もう1件はゴードン・ヒサシ・サトウ博士が受賞者として正式に決定されました。

■本件に関するお問い合わせ先

財団法人 旭硝子財団	〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2階
事務局長 鮫島 俊一	TEL : 03-5275-0620 FAX : 03-5275-0871
	e-mail : post@af-info.or.jp
	URL : http://www.af-info.or.jp

ニコラス・シャックルトン教授 (Professor Sir Nicholas Shackleton)

地球の過去の気候変動を知ることは、今後の気候変動をより信頼できる形でシミュレーションする上でも重要である。シャックルトン教授は地球の歴史からするとごく最近である第四紀、現代から約 180 万年前までに着目し、その間に何度も繰り返された氷床の消長をより正確に解析する手法を編み出し、古気候学に大きく貢献した。

教授はケンブリッジ大学で物理学を修めた後、1967 年に「第四紀の古温度（先史時代の海洋等の温度）の測定」というテーマの論文で博士号を取得した。この研究を進める上で教授は、質量分析計の構造を改良して、海洋底堆積物を掘削して得たコア（柱状堆積物）中の微小な化石サンプルを分析できるようにした。世界中の海洋から採取した有孔虫の化石殻中の酸素同位体比を分析し、いずれの地点でも同時代のサンプルでは同位体比が同じ変化のパターンを示すこと明らかにした。

熱帯地方の海で水が蒸発する時は、 ^{18}O の含量の少ない軽い水が蒸発しやすく、その後、 ^{18}O が多い重い水を先に雨として降らせながら、水蒸気は（雲として） ^{18}O 含量を徐々に減らしつつ高緯度地方へ運ばれることが知られている。そして最終的に、極地方で ^{18}O 含量がもともとの海洋と比べはるかに少ない雪となって降り積もるので、氷床は常に海洋より ^{18}O 含量が少ない雪によって作られることになる。教授は北アメリカとスカンジナビア地方が厚さ 3km の氷床に覆われ、海面が 120 メートル低下していた氷河期の海洋の水には ^{18}O がはっきり差がわかるほど濃縮されていたことに着目し、何度も繰り返された氷河期の全地球氷量（主に北半球）推移の歴史を再構築する手法を発見した。

教授は 1973 年に、約 78 万年前に起こった最後の地球磁場逆転を示す層を含む西熱帯太平洋から採取したコアを分析した。測定から得られた氷量の周期はおおよそ 10 万年であることが明らかになった。そして、その後の堆積物コアを分析するにあたっては、観察される氷河期周期の古い順序それぞれに、最初のコアの対応する周期と関連付けられることが分かり、それによって最初のコアの 10 万年周期に基づく年代尺度決定法を発見した。

さらに、堆積物コアの周期性を研究することにより、主要な周期が地球軌道の離心率の主要な変化に同期していることを明らかにして、ミランコビッチ仮説を裏付けることとなり、J. D. Hays、J. Imbrie 両博士と共に 1976 年に論文を発表してこの考えを厳密に立証した。1920 年代、30 年代に、ベオグラード大学のミランコビッチ教授は、地球軌道の離心率、自転軸の傾きおよび歳差運動の 3 要素を考慮して地球表層への太陽放射量を 60 万年前まで遡って計算した。仮説で、ミランコビッチ教授は、これらの変化がその当時氷河作用を引き起こしたとする仮説を提唱したが、この考えは容易に受け入れられなかった。Hays、Imbrie 両博士とシャックルトン教授は深海底堆積物中の酸素同位体や他の記録に 1.9 万、2.3 万年（歳差運動）、4.1 万年（自転軸の傾き）、10 万年（離心率）の周期性がすべて検出されることを示した。このことにより初めて、地球上の異なる地域の気候が良く知られた外力要因（この場合軌道の変化）に応答するかを調べるのが可能になった。

地質学の観点からこの重要な発見は、3つの軌道周期性すべてを使うことができるように

なったことにより、堆積物コアの年代を精度高く正確に測る方法を提供することとなった。シャックルトン教授は軌道により較正された年代を、徐々に遡って 3000 万年前まで展開することができるようにした。これによって、地球磁場の逆転現象と海洋生物の発生と消滅の正確な時期が明らかになった。

最後の氷河期の氷に閉じ込められていた空気中には二酸化炭素が少なかったことをフランスとスイスの科学者達が発見した後、教授は有孔虫化石中の炭素同位体比を使い、過去の二酸化炭素濃度を改めて測定した。再測定した結果は、南極の中央にあるヴォストーク基地の氷床コアサンプルからフランスの科学者達によって得られた最初の記録と驚くほど似通っていた。その後の研究で、教授は、二酸化炭素が過去の地球における気候変動の主要な原因の一つであったことを示し、事実、過去数百万年にわたる気候変化の主だった特徴は地球軌道変化と自然の二酸化炭素を考慮することで説明できることを示した。この研究は、私達が、将来急激な気候変動を引き起こすかもしれない地球温暖化ガス（特に二酸化炭素）について理解するのに貢献した。

最近、教授は一番最近の氷河期の詳細な記録について研究を行っている。グリーンランドの氷床コアの研究から、例えば 30 年足らずのうちに気温が 10℃も変化するような急激な温暖化と寒冷化を、地球が経験していることがわかってきた。こうした変化は北大西洋の堆積物コアからも見出され、シャックルトン教授は、ヨーロッパの研究チームを取りまとめることで、海洋堆積物中にその花粉が見出されるヨーロッパの植生を含む、この変化の多数の側面を再構築することができた。そして、この時代の急激な気候変化は海洋流の突然の変化により引き起こされたという考え方が、学界でコンセンサスを得つつあることを、多くの研究者が指摘している。一つの例として、北大西洋への熱コンベアー・ベルトとして機能するメキシコ湾の暖流が過去に弱まったか、止まってしまったかもしれないということが考えられる。そして、このような変化は人間活動から引き起こされる地球温暖化によって、その引き金が引かれるかもしれないという恐れがあることも指摘している。

シャックルトン教授は、古海洋学・古気候学の発展に大きな影響を与え、多くの国際研究プロジェクトで中心的役割を果たし、これまでに特に著名なものを含めて 200 篇を超える学術論文を執筆したばかりでなく、多くの若手研究者を育成し、その積極性溢れる態度によりこの分野全般の進歩を牽引してきた。ケンブリッジ大学・第四紀研究ゴッドウィン研究所の所長を務める傍ら、国際第四紀学会の会長など多くの要職を兼務してきた。また、国際的な海洋掘削計画でも大きな役割を果たした。

教授は、南極探検家の Sir Earnest H. Shackleton (1874-1922) とは遠縁の関係にあり、父は野外調査をする最後の偉大な地質学者と言われた。父の研究の関係から子供時代に多くの時間を東アフリカで過ごした教授は、父の影響を大いに受けて地質学の領域に進んだ。「野外に出かけて田園地帯を歩き回り新しいものを探するのが大好きなのでこの方面に進んだのに、分析などにより生涯の多くの時間を研究室で過ごすことになった。」と、教授は後年振り返っている。また、教授は、地質学を研究することにより過去の地球気候をはじめとして地球環境の様子を知ることができれば、将来、地球環境に問題が起きそうなときに、それに対処する方法を

見つけることができるので社会に貢献できるという考えを持っていた。人類紀とも言われる第四紀の地球気候変化の解明に情熱を注いだ教授は、温室効果ガスの増大が、過去に起きた急激な気候変化を将来起こす引き金となる可能性があることを、私達が気づかねばならないと警鐘を鳴らし、人類が温室効果ガスの放出をコントロールする努力しなければならないと訴えている。

古気候学と古海洋学の研究に加え、シャックルトン教授はクラリネットを演奏すると共にクラリネットの熱心なコレクターで、その歴史についても広く研究している。

〔略歴〕

1937年6月23日生まれ

1961年 ケンブリッジ大学 BA 取得

1964年 ケンブリッジ大学 MA 取得

1965-72年 ケンブリッジ大学上席研究助手

1967年 ケンブリッジ大学 PhD 取得

1972-87年 ケンブリッジ大学・第四紀研究科・研究科長補佐

1974-75年 米国コロンビア大学・Lamont-Doherty 地質学研究所上席客員研究員

1975-2004年 米国コロンビア大学・Lamont-Doherty 地質学研究所上席研究員

1987-91年 ケンブリッジ大学準教授

1988-94年 ケンブリッジ大学・第四紀研究科・研究科長

1991-2004年 ケンブリッジ大学 *Ad hominem* 教授

1995-2004年 ケンブリッジ大学・第四紀研究・ゴッドウィン研究所長

2004年～ ケンブリッジ大学名誉教授

〔受賞歴等〕

1985年 Fellow of The Royal Society

1990年 Fellow, American Geophysical Union

1995年 Crafoord Prize, Royal Swedish Academy of Science

1998年 Knighthood (for Service to the Earth Science)

2000年 Foreign Associate, US National Academy of Science

2002年 Ewing Medal, American Geophysical Union

2003年 Urey Medal, European Association of Geochemistry

2003年 Royal Medal (Royal Society of London)

2004年 Vetlesen Prize, Columbia University

2005年 Founder's Medal, Royal Geographical Society

ゴードン・ヒサシ・サトウ博士 (Dr. Gordon Hisashi Sato)

博士はご自身が第二次世界大戦中に日系人としてカリフォルニアの砂漠地に強制収容された過去の経験から、砂漠地のような厳しい環境下でいかにして食料を生産するかという課題と取り組んで来た。海沿いの砂漠地という厳しい環境にもふんだんにある海水と日光を利用し、「藻類 → Brine shrimp → 魚」の食物連鎖を念頭におき「砂漠の中で藻類を育てる」研究に取組み、砂漠地での養殖漁業を実現した。さらに、「飢餓に苦しむ途上国での生態学に基づく食糧生産計画と環境保全」を進め、世界で最も乾燥した地域といわれるエリトリアにおいて斬新なマングローブ植林技術を開発し、それを利用した家畜生産技術に発展させ地域住民の生活改善を通して持続可能な地域社会の構築の可能性を示し、食料生産の推進、砂漠の緑化に対しても先駆的な貢献をした。

これは、最貧地域における経済的な自立への一方策を具体的に立証したもので、その功績は極めて大きく、環境の保全の技術というものを地道に取り上げる生き方、ヒューマニズムの大切さを訴えている。

サトウ博士は、米国に移民した日系人一世の父と二世の母の子として、1927年12月17日にロサンゼルスで生まれた。その生い立ちから、義理人情や思いやり等、昔ながらの日本人的性格を強く持っていた。第二次世界大戦中に2年間、カリフォルニア州の砂漠にあるマンザナル日系人強制収容所に家族とともに収容され、これがその後の博士の生き方に大きく影響し、虐げられた人々への共感を育み、荒地での食糧生産の考え方のきっかけを形作った。マンザナル高校を卒業し、終戦直後はアメリカ軍の兵士として、韓国から敗戦直後の博多に入り、両親の母国をはじめて見た。

米国に戻り、南カリフォルニア大学ロサンゼルス校で生化学を学んだ後、カリフォルニア工科大学 (CalTech) のあるパサデナで庭師の仕事をしていた頃、たまたま入り込んだ CalTech で、ノーベル生理学・医学賞を受賞することになるマックス・デルブリュックに話を聞いてもらう機会を得た。デルブリュックは博士の入学希望の話を中心に聞いてくれ、特別生としての受け入れ審査の便宜を図り入学を認めさせた上、数年間経済的にも援助した。これらのことは、博士の人生を大きく変えることになり、博士はデルブリュックに受けた恩を一生忘れず、「教育こそ人の育成の根源である」との考えを育み、自ら若い人に教育の機会を与えることを実践し、後に、W. オルトン・ジョーンズ細胞科学センターの所長時代に中国人を数多く支援したほか、現在ではエリトリアから若い人を米国に呼び、教育援助を行っている。

CalTech での研究室には、当時、後にデルブリュック同様ノーベル生理学・医学賞をそれぞれ受賞することになるレナト・ダルベッコ、ジム・ワトソン、ニールス・イェルネなどがいてサトウ博士は大いに刺激を受けた。デルブリュックの下で研究を積み、1955年に生物物理学で PhD を取得後、カリフォルニア大学バークレー校、コロラド大学医学部での研究を経て、1958年にマサチューセッツ州のブランダイス大学の生化学科助教授に就任した。1969年まで同大学で准教授、教授を務め、電氣的に興奮し、神経突起を出すマウスの神経芽腫細胞のクローンを初めて単離して分化細胞株単離の端緒を拓く業績を上げた。1969年にカリフォルニア大学サンディエゴ校に移り、83年まで生物学の教授を務めた。ここでは、イズミ・ハヤシと特定のホルモンを含む無血清培地による細胞培養に成功して、細胞株に特異なホル

モンと成長因子が必要なことを明らかにした。この複雑な成分を含む血清を使用しない精製されたホルモンのみを含む培地による培養法の開発は分子細胞生物学の発展の端緒となったばかりでなく、動物細胞を用いた有用物質の工業的生産というバイオインダストリー発展にもつながった極めて革新的な業績である。博士はこのように、主に哺乳動物細胞の培養に関して学術的に大きな貢献をした。

1980年代初めのカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）時代から、砂漠のような厳しい環境下でいかにして食糧を生産するかに取り組み始め、食物連鎖を利用した養殖漁業を念頭において「砂漠の中で藻類を育てる」研究に着手した。第二次世界大戦中にカリフォルニアの砂漠にあった日系人強制収容所での体験を踏まえ、これをマンザナール・プロジェクトと名付けた。1983年にサトウ博士はUCSDからニューヨーク州レーク・プラシッドにあるW. オルトン・ジョーンズ細胞科学センターに移り、ここで、厳しい環境下で飢餓に苦しむ人々にも健康で持続可能な生活を実現することを目標とするマンザナール・プロジェクトに本格的に取り組んだ。1980年代半ばには研究結果を踏まえた実生産施設が南米チリのアタカマ砂漠と中国の福建省に作られた。しかし、残念ながらいずれも地元民の積極的な協力が得られなかったことから、新たな土地を模索しエリトリアに着目した。エリトリアが選ばれた理由として、当時エリトリアがエチオピアの支配下であり、住民が虐げられ、飢餓に苦しむ等、第二次世界大戦当時の米国の日系人と共通するところがあり、博士が共感したためと言われる外、エリトリア人の勤勉さ、自主性等に惹かれたためという。こうして、博士は1986年からエリトリア北部の海岸地帯で養殖漁業を実践、開始し、その献身的な行動はすぐに人々に受け入れられた。

養殖漁業を行うにあたって、池の周りの土手を保護するためマングローブを植林し、さらに実験的に海面より高い土地にマングローブを植え海水による灌漑を行った。いずれの場所のマングローブも短期的には自然の生息地同様に茂った。この事実から、砂漠の海岸線をマングローブの森に変えることが、家畜の飼育を可能にし人々を経済的に自立させるより積極的なアプローチにつながるのではないかと考え方が浮かび上がってきた。

サトウ博士は常に「チャレンジすること」、「批判を恐れるな」との教えを説き、この時も自らこれを実践し、可能性にチャレンジした。こうして、エリトリアの海岸線にマングローブを植林するプロジェクトが始まった。従来、エリトリアの海岸線では、その15%にしかマングローブは生息しておらず、そのマングローブも、年間20mmの降雨が数日間海に注ぐ地域のせいぜい海岸線から100m程度の範囲に限られていた。この少ない雨が陸からマングローブの生育に必要な栄養素を供給していると考え、無血清培養の研究発想で分析を行い、海水中にはマングローブの生育に必要な要素の内、窒素、リン、鉄が不足していることを明らかにした。そして、これら要素をゆっくりとマングローブに供給する基礎的な技術を考案した。潮間帯に植えたマングローブの苗木のそばの砂の中に、尿素とリン酸二アンモニウムを500グラム、3対1の割合で入れて封じ、片側に直径2mmの釘で3つ孔を開けられたプラスチック製の肥料袋を埋めるという方法である。この中には欠けている2つの要素、窒素とリンが含まれており、袋の片側に開けた小孔からゆっくりとしみ出す。さらに苗木の周りを鉄線で作ったケージで被い苗木が波にさらわれるのを防ぐとともに、このケージは鉄分の補給源となる。この方法により窒素とリンと鉄分を徐々に供給して80万本以上のマングローブを成育させることに成功した。

葉や実は家畜の飼料、材は建材と燃料になりマングローブの周りには魚や貝が生息して食料となり、魚を追い求めて鳥も集まるようになった。従来生育が困難とされていた地域でも簡単かつ安価にマングローブの育成が可能となった。また、外部の援助なしに、エリトリアの現地住民のみにより自主的に植林を行うことを可能とし、彼らを貧困から解放する画期的手段を提供した。この簡潔明瞭な方法は、自然環境の厳しい後進地域の環境向上を実現しながら、経済的自立を可能とする一つの具体例を立証したものとして高く評価できる。

エリトリアの現地でも、政府、自治体、学会から地元住民に至るまで、貧困の根本原因を解決しようとの戦いに対する博士の科学者としての謙虚で足が地に着いたやり方は尊敬と高い評価を得ており、紅海岸のエコシステム、そして遊牧民とその家畜たちは既に博士のアイデアと仕事の恩恵に浴している。

このマンザナル・プロジェクトの目指しているところは、砂漠のような厳しい環境でも、人々が自立し、持続可能な経済システムを作り上げられるようにすることであり、これまでの、アフリカへの先進国からの援助とは異なり、博士の活動はものを供給するのではなく、食糧生産の手段と同時に人々に仕事を与え自立する手段を提供するもので、今後の援助の仕方について大きな示唆を与えている。

〔略歴〕

- 1927年 12月 17日 米国ロサンゼルス市生まれ
- 1944年 マンザナル高校卒業
- 1951年 南カリフォルニア大学ロサンゼルス校生化学 BA 取得
- 1953-55年 カリフォルニア工科大学 微生物学助手
- 1955年 カリフォルニア工科大学 生物物理学 PhD 取得
- 1958年 ブランダイス大学生化学科助教授
- 1963年 ブランダイス大学生化学科准教授
- 1968年 ブランダイス大学生化学科教授
- 1969-83年 カリフォルニア大学サンディエゴ校教授
- 1983-92年 W. オルトン・ジョーンズ細胞科学センター所長
- 1987年～ クラークソン大学分子生物学研究室教授兼室長
- 1992年～ W. オルトン・ジョーンズ細胞科学センター名誉所長

〔受賞歴等〕

- 1982年 ローゼンティール賞 (ブランダイス大学)
- 1983年 米国科学アカデミー会員
- 2002年 ロレックス賞 (The Rolex Awards for Enterprise)
- 2002年 米国組織培養学会名誉功労賞 (Lifetime Achievement Award)
- 2005年 カリフォルニア工科大学名誉功労同窓賞 (Distinguished Alumni Award)

受賞の辞

ニコラス・シャックルトン教授

ブループラネット賞は、私の生涯でこれまでにいただいた最高の荣誉です。また、それが日本から贈られたことも特別の喜びです。

私の科学分野における研究は地質学上の過去の地球に起こった様々な変化に関するものです。私の研究が、地球の将来環境について主たる関心を持つ人々にとっても重要であることを旭硝子財団にご理解いただけるのは大変うれしく思います。

私にとりまして、科学研究者としてのひとつの大きな魅力は、多様なバックグラウンドを持ち、研究に対するアプローチの仕方も異なる世界各国の研究者と協力する機会があることです。私の研究生活を通じて、私は少なくとも 20 カ国以上の異なる国の研究者と仕事をしました。この機会に、私はそれらの人々すべてに対して、私の人生を科学的、文化的そして交流面で富ませてくれたことに感謝をしたいと思います。ケンブリッジ大学は私の研究生活をずっと支えてくれ、従来の伝統的な学際的境界を越えて仕事ができるようにしてくれました。

このたびは私の業績を認めていただき誠にありがとうございます。

ゴードン・ヒサシ・サトウ博士

このたび旭硝子財団のブループラネット賞を受賞することになりましたことを深く感謝いたします。私は地球環境問題の解決に大きな貢献をされた歴代の受賞者と並び列せられることを大変光栄に存じます。

私はこの名誉をエリトリアの素晴らしい人達と分かち合いたいと思います。1987 年から私は、飢餓から救済すべく持続可能な経済を確立するとの目標をもって、当時戦争で荒廃し、貧困に陥った同国に行くようになりました。それ以来、私達は世界で唯一、収益が得られる自立可能な海水農業プログラムを確立しました。このプログラムはまた環境に対し数々の顕著な好影響をもたらしました。現在、エリトリアの海岸に沿って広がる潮間帯に繁っている 80 万本のマングローブの木は、何千人ものエリトリア人の食用に供せられる家畜の群れを飼育する素晴らしい飼料となるばかりでなく、魚にとって栄養に富み外敵から守ってくれる生育環境をもたらすことにより、海の中に魚を増やしています。

私は、ブループラネット賞がエリトリアにおける私達のプログラムの発展を支援するだけでなく、世界の他の地域における事柄から習ったことを適用する道を拓き、飢餓からの救済をもたらすばかりでなく、津波被害そして地球温暖化の問題を無くすことに役立つと期待しています。

飢餓と戦いつつ、将来の世代のために地球を守る手助けをしようとする私達のミッションをご理解・ご支援いただきありがとうございます。

<受賞者からのメッセージ>

日本の皆様へ

ニコラス・シャックルトン教授

ブループラネット賞は惑星地球の自然環境の研究に贈られる最も著名な賞であります。この栄えある賞の受賞者に選ばれ、私としては大変光栄に存じています。

私は、研究生活のすべてを地質学上の過去における気候と環境変化をより一層解明することにささげてきました。私は、過去を研究することで、世界中の科学者たちが、我々が作った将来の気候にとっての負のインパクトをどのようにしたら減らすことができるかを学ぶことができると、確信しています。これが、目下、人類が直面している最大の難問です。

ゴードン・ヒサシ・サトウ博士

旭硝子財団のブループラネット賞を受賞し光栄に存じます。世の中の高い評価を得ている財団に認めてもらい支援していただくのは大変意味のあることです。旭硝子財団を通じて、私の祖先の国が環境を守ろうと努めているのは、大変うれしいことだと思っています。

この賞を受賞することで、私のエリトリアやその他の国で行っている活動をさらに広げることができます。アフリカで習得した自立経済の教訓は他のところでも適用できます。例えば、自分が消費する食料の40%しか生産しない日本にでもです。

創造的な発想と科学を組み合わせることで、私達は世界中が必要とするものの大半を満たすことが可能です。その実現に向けご支援いただきありがとうございます。